

## お湯のある風景

お風呂と、お湯の  
ある暮らしを解く

## 第1回

社会の仕組みが  
うまく機能し、  
今のお風呂がある現代はお風呂が  
便利に使える時代

多くの日本人にとってお風呂は一日の生活に欠かせないものだ。お風呂が大好きという感覚は、おそらく戦前あるいはそれ以前からあったと思うが、自宅で温泉にいるような気分が味わえるようになったのは、戦後、ほとんどの家に浴室が設けられてからである。そして、その浴室の内や外にガス燃焼の風呂釜が設けられた。

現在、日本人はすべてとはいわないまでも、ボタン一つでお風呂の準備ができることを知っている。また、そうした全自動の風呂給湯器を実際に使っている人も多い。浴槽を簡単に洗い、浴槽の底の排水口に栓をし、蓋

をかけて全自動のボタンを押すだけでよい。母親から「お手伝いしてね」と言われた小学生でも難なくできる。あらかじめ好みの湯量、湯温がセットされ、その湯量、湯温に達すれば「お風呂が沸きました」などと軽快な音で教えてくれる。

このような便利な装置を使って入浴できるのは世界中を探しても、現代の日本人だけである。長い人類の歴史のなかではさまざまな入浴の仕方があったであろうが、記録に残っていないのはるか昔にはもっと素晴らしい文明があつて、現代では想像もつかないようなお湯の利用がされていたかもしれない。しかし、歴史上の痕跡をたどって想像する限りにおいては、全自動の風呂給湯器はおそらく世界で初めての入浴装置なのである。

古代ローマの巨大な浴場施設であっても、ミノス文明の女王の宮殿の浴室であっても、こうした便利で簡単な装置は存在しなかった。江戸時代や明治になってからも、家庭でお風呂を沸かし、入浴するには大変な労力が必要だった。だから、毎日入浴するというようなことは気が遠くなる話だったのではないだろうか。現代のお風呂は、それこそ誰でも簡単に入れるということが、実は歴史的にも画期的なことである。

全自動の風呂給湯器が開発されたのは1980年代であり、人類の歴史のなかではごく最近の出来事に過ぎない。それにもかかわらず、日本では今や当たり前に使われている\*1。まるで、過去からずっとそんな生活が続いてきたかのように、今の人々はそれを特に意識することもなければ、ありがたいこととも思わず入浴を楽しんでいる。

※1 現在は電気・石油給湯機器にも全自動機能が普及している。

こんな便利な暮らしは  
今後も続けられるのかとふと思う

便利なお風呂の機器をあまり意識せずに使っているが、このような装置は今後もあり続けるのだろうか、こうした日本人の快適な入浴は今後も続けていけるのだろうかといった思いが頭をよぎる。今は激動の時代であり、世界中の変化が極めて激しいと感じるからである。日本人の暮らしや価値観も強く影響を受け、大きく変わりつつある。戦後の家

族や個人の関係も大きく変わり、高齢化や少子化が進み、暮らしの風景も毎年のように変化している。

国際都市は、さらなる進化を目指して世界中で競合し、高層建築物が林立し、より機能的にしようと交通体系もめまぐるしく変わる一方で地方の盛衰も激しい。極めつければ情報化社会の進展である。この社会は、まだ成長段階にすぎないといわれている。昨今注目されるAIの進化や、想像を絶する規模のデータセンター建設とそれに伴う莫大なエネルギーの確保、そして巨大化する半導体産業のさらなる進化である。こうした技術革新はグローバルに進み、日々の変化も激しい。そうした流れはメディアを通じても強く感じられ、その影響も受ける。狭くなったと実感する地球上では、国際間の交流も急速に進み、複雑な状況にある。こうした動きが日本文化に影響を及ぼさないうちはずはない。そして、この状況が平穏に続くとも思えない。

さらに、厳しくなる地球環境問題がある。温暖化や凶暴化する自然災害が日常の暮らしに大きくのしかかって来ていると感じられる現代である。そんな現代に立ち込めるどころなくすっきりしない空気感がある。

こうしたさまざまな状況の変化を意識し、今後の暮らしについて漠然と考えてしまう。入浴はそうした暮らしの一部であり、全自動の風呂給湯器を使うことで、便利な生活が今後どうなるのかという思いが頭をよぎる。そして、その先に重要なことがあることに気がつく。現在の全自動の風呂給湯器、そして現

代の便利で快適な入浴は、常に進化してきた現代社会のさまざまな仕組みが相互に機能し合って成り立っていることである。だからこそ、今後もこうした暮らしを続けていけるのか、どうすれば維持し、さらに発展させることができるのだろうか。漠然と抱いた「社会の仕組み」とは、お湯のある暮らしにおいて何なのか。

それらについて、思い至ったいくつかをここでは簡単に触れておく<sup>※2</sup>。

※2 社会の仕組みは広範に及ぶが、ここではお湯のある暮らしに限って考えを進めたい。

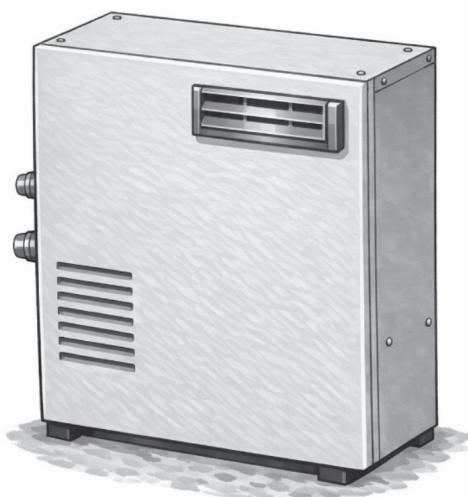
## 便利なお風呂の社会の背景・仕組み その1 インフラが機能していること

全自動機能の普及により入浴は大きく利便性を高めたが、その前提として水道、ガス、電気といったインフラの整備がある。このどれ一つが欠けても、全自動のような便利な機器は機能しない。実際、地震や豪雨、洪水などの自然災害が発生してインフラの一部が機能しなくなると、人々は慌て、すぐにその大切さに気づく。また、メディアによる報道も相まって、その印象は強く残る。

入浴の歴史に目を向けると、特に水の確保（水道整備）、そして火力（木材などの燃料）は不可欠な要素であり、その重要性は明らかである。インフラの整備は、それぞれの時代の暮らしを想像させる。水の確保すら難しい時代には、その苦勞の大きさがうかがえる。

現代ではインフラの整備はかなり進み、さ

らに大きく拡充する段階にはないが、むしろ今後いかに維持していくかに関心が移っている。人口減少社会においては、地方の暮らしを支えるインフラ維持が課題であり、都市においても老朽化したインフラを常に更新し続ける必要が起き、そのたびに問題が顕在化する。維持管理を担う人材の確保や技術力の維持は、一見地味であるが極めて重要である。普段目立たない仕事であるだけに、その努力は十分に理解されにくい。ともすれば限られた予算での対応を余儀なくされることもある。十分な人材確保ができるのかといった課題も生じる。こうしたインフラは、日常的に問題なく機能していることが前提となっている。ところが、昨今、上下水道管理の問題が注目され、その対処に強い関心が寄せられている。こうした社会インフラの問題は電気・



初期の全自動風呂給湯の外観（イメージ）

ガス・水道に限らない。トンネルや橋の老朽化への対処、高速道路の維持管理も同様に大きな社会課題である。事故が起きるたびに指摘される状況が続いており、こうしたインフラの維持管理こそが、今後もお風呂を便利に利用し続けるための“一丁目一番地”なのである。

## 便利なお風呂の社会の背景・仕組み その2 機器の継続利用とその背景にあるもの

第二に、インフラと同じようにすぐ思い浮かぶのは全自動の風呂給湯器そのものの継続的生産と販売、普及である。こうした機器が無くなる、つまり作り続けられなくなったら、便利なお風呂のある暮らしは到底できない。どんなに素晴らしい機器が発明されても、それが普及して人々が利用できなければ、その機能の良さは生活する人には伝わらない。暮らしが良くなることにもならない。当たり前のことであるが、これは機器に関わったことがある人たちは実感として分かっている。

ガス機器は戦後の初め頃から進化を続け、その機能が認められ、少しずつ普及が進み、人々の暮らしも少しずつ良くなった。もっとこうして欲しいといった要望に、少しずつ応えていった。人々は、少しずつ改良された機器を設置して、それを使っていくことで、結果として機器の生産継続が支えられてきた。人々は機器が無くなることなど

まったく意識しなかった。メーカーもそれこそ多くの人々に認められるよう研究開発や、製造販売に力を入れた時代がずっと続いた。そして普及拡大に日夜努力を惜しまない時代だった。だからメーカーも、便利な機器が無くなったらなどと考えもしなかっただろう。

しかし、時にせっかく開発し販売にこぎつけても売れない機器はあった。優れた機能が新たにつけられた自信作として市場投入した機器でもあまり売れないことがあり<sup>※3</sup>、その後、製造中止となり、交換部品が供給されなくなることがあった。こうした機器を設置した人々は、それまで便利に使っていたとしても、故障して使えなくなると大きな工事をしなければ別の機器に交換できない場合があった。戦後の風呂給湯器などは、2000年に至るまでは常に機能や能力が少しずつ向上したので、利用していた人々は、少しずつ便利になったことを感じていて、交換して継続使用できない不便さはあまり感じなかったのかもしれない。機器はずっと良くなるものと信じて使っていたのであろう。

そして機器は進化を続け、全自動の風呂給湯器が開発されるに至った。その機器は多くの人々に受け入れられたので市場はさらに拡大した。また、同時期に、サーモ式混合水栓やシャワー設備も充実して快適なお湯のある暮らしができ、市場は一層充実していった。メーカーは、さらに改良した全自動の風呂給湯器を製造する。長いこと、こうした良い循環のなかにあった。新たな開

発、生産そして販売、普及が続き、人々のお湯利用に対する意識も成熟した。こうしたことが現在の市場に繋がっているのである。多くの人々に受け入れられた機器は結果として膨大なストック市場を形成した。現在は、この膨大なストック市場がさらに少しずつ進化してうまく機能している。メーカーは市場がある程度分かっているのでも、同じような機能を持った機器をいくつもそろえることができる。競合他社は負けまいと機能に新たな工夫をする。これらのさまざまに機器はいつでも購入して設置できる体制にある。もちろん故障した場合には部品交換や本体交換をして素早く利用できる<sup>※4</sup>。こうしたことがあまり意識することもなく十分機能を果たしている。

さらに考えを進めてみよう。こうした仕組みに深く関与してきたさまざまな人々の存在がある。過去から常に努力を重ねてきたメーカーの開発、製造、営業(販売)、保守、サービスなどに関わった人たちと組織、そしてそれがずっと継続されてきたこと。また、機器や部品の流通や販売に関わった多くのショップとそこで業務を担当した人たち。さらにLPガス、都市ガス事業者も、優れたガス機器の提案、そして普及、保守に大きな役割を果たしてきた。さまざまに関連した機関も多くあった。例えば機器の適正検査や評価をずっと担当して不具合を指摘した機関の存在。国や地方自治体の関与もあった。上下水道事業者や住宅、建設事業者の影響も強かった。メディアの働きも考えられよう。便利なお風呂を継続して

いく背景、進化しつつ機能し合う社会の仕組みは、もしかしたらこれだけにとどまらないかもしれない。極めてそのすそ野が広いのである。

※3 機器が市場から消える要因は、採算性に加え、企画・技術・生産面での競争力不足や企画倒れなどである。さらに、家電製品の登場により、コストや意匠で競合できなかった例もある。

※4 半導体不足により風呂給湯器の供給が停滞した時期があり、ガス事業者やメーカーは対応に追われた。機器は一部品でも欠ければ成立せず、その供給網も含めて社会の仕組みを構成している。

### 便利なお風呂の社会の背景・仕組み その3 日本人のお風呂へのこだわり と住まいの適応

第三に考えるのは、日本人のお風呂へのこだわりと住まいや住宅部品の適応についてである。戦後いち早くお風呂のある暮らしを望んだ日本人は多かった。ガス機器の開発と普及においても、ガス風呂釜への関心は強かったといえる。日本住宅公団は戦後の住宅不足解消のために集合住宅を多く建設したが、そこにあえて浴室を設けた影響も大きかったであろう。狭い居住面積の住戸に浴室を設け、しかも浴槽のほかに洗い場スペースも確保したのである。これは日本らしい住まいの画期的な進歩といってもよい<sup>※5</sup>。これが戦後の住まいにおける浴室設計の定着に繋がりを、さらにそこから風呂釜でお湯を沸かした。お風呂ですばや

くお湯を沸かせるというガスの特長が、その後のお風呂の進歩に繋がった。

日本人のお風呂へのこだわりは、熱いお湯を沸かしてそこに入ることにある。温くなったら入浴したままでも追い焚きをする。西洋のようなシャワーを浴びるだけ、あるいはたまに温いお湯に入って身体を洗うような入浴ではない。今でも40℃以上に沸かしたお風呂に入る人は多く、もっと熱いお湯に入る人もいる<sup>※6</sup>。十分に身体を温め、洗い場で身体を洗う。ゆつたりと身体を冷やし休めた後、また熱い湯にゆつたりと浸かる。日本人の入浴は、温泉との関りも強い。外国人にとっては信じられないような熱いお湯に、あえて身体に負担をかけるようなお湯に入る。インフルエンザで体温が40℃になったら大慌てなのに、それより高いお湯にゆつたりと浸かって恍惚とする。こんな入浴の仕方は、これもまた人類の歴史上でも特異なことに違いない。

こうしたこだわりに応えて来たのがガス風呂釜と浴室設計である。長期の使用に耐える浴槽やシステムバス、洗いをスムーズに行える排水、水切れを良くした床面の工夫などいくつまでもある。ほどよい照明、すばやく湯気を排出できる静かな換気装置など、快適で便利なお風呂を支える住宅部品の工夫も多い。日本人の意識に沿い、

それぞれの役割を果たしてきた要素が組み合わせさり、今のお風呂が成立している。

※5 外国の浴室に洗い場は無い。また、日本でも昔の農家のお風呂場には、土間に木の丸い浴槽を設置しその横に篋の子を置いただけの簡単な作りも多かった。

※6 戦前から戦後初期にかけては、入浴温度を45℃前後とする記述が多く、1934年刊『高等建築学第12巻 建築設備』（常磐書房）や、1961年刊『建築設備ハンドブック』（朝倉書店）にも見られる。ガス風呂釜の沸かし上げ能力の試験も、45℃に達するまでの時間を基準としていた。現在、厚生労働省や消費者庁は、冬の入浴中の事故を防ぐため「湯温は41度以下、入浴時間は10分まで」を目安にすることを推奨している。

### 日本人のお風呂文化は 今後も続くのか

なぜ、日本人は熱いお湯に入るのか。温くなったら沸かし返しをして満足するのか。こうした日本人のお湯のある暮らし方や、そこに生じるいくつかの疑問について、次回以降、さまざまなお湯の風景を見ながらさらに確認していこう。



村田 幸隆  
むらた・ゆきたか  
一般財団法人ベターリビング  
アドバイザー  
1973年東京ガス株式会社入社  
住宅性能および住宅設備、部品の開発、評価業務を担当。また、住宅産業に関わる諸団体事業に幅広く関与。2012年住宅保証機構株式会社監査役、同一一般財団法人ベターリビングサステナブル居住研究センター副センター長、2019年より現職。